



法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催

第69回“社会を明るくする運動”作文コンテスト



誰もが必要とされる社会を目指して



島根 山本 彩永

最近、多くの人を傷つけた犯人が自ら命を絶つという事件が起きました。テレビやインターネットなどでは、犯人について「死にたいなら人を巻き込まずに死ぬべきだ。」「死ぬのなら人に迷わくをかけずに死ねばいい。」などといった意見が多く見られました。私は、この事件の報道を見て、とても悲しくなりました。同時に怒りの気持ちもわき上がりました。そして、大切な家族や友達が殺されてしまったらと考えたら、犯人は一人で死ぬべきだと思っていました。

しかし、私とはちがう考えをもっている人がいました。それは、NPO法人代表の方で、その人は、

『死にたいなら人に迷わくをかけずに死ねばいい。』と言うのはやめよう。このような言葉を受けとった、犯人と同じ思いをもつ人は、社会は何もしてくれないという思いを募らせるのかもしれない。社会はあなたを大事にしているし、何かできるのかもしれない。社会はあなたの言葉を軽視していないし、死んでほしいと思っている人間など一人もいない、という強いメッセージを発信していくべきだと思う。」

という事を言われていました。

犯罪を起こしてしまう人は、「自分は社会に必要な人間だ。」「自分の味方などだれもいない。」と思っているのではないだろうかとは考えます。そのような思いが心の中にどんどんたまって行って、悲しくて、苦しくて、もうどうしようもなくなって行って、その気持ちが社会に対する「怒り」に変わっていった結果、犯罪を起こす気持ちになってしまうのだと思います。

そして、その犯罪を起こしてしまった人にも家族がいます。ただでさえ

自分の身内が犯罪を起こしてしまったことでショックを感じていると思うし、「犯罪者の家族」として世間から見られるだけで、その後の生活は苦勞の絶えないものになっていくのだろうと考えられます。そんな中で、「一人で死ねばいい。」などといった報道を目にすることは、想像を絶するくらいつらいことなのだと思います。

自分は社会に必要な、と思っている人がいるのならば、そういう人たちが少しでも社会の中で自分が誰かのために役に立っているという喜びを実感できる仕組みができればいいと思います。今、小学生である私には、大きなことはできません。私にできることは何だろう……。いろいろ考えてみましたが、一つは自分から進んであいさつをすることだと思いました。私たちの地域では、登校時に、「見守り隊」と呼ばれる人たちが、主に交通量の多い横断歩道で交通指導をしてくださっています。自分からあいさつをすることで、とても喜んでもらいました。あいさつを通して、「人とつながる喜び」を感じました。あいさつのあふれる地域を実現することで、だれもが地域の一員としての所属感をもつことができるのだと思います。

また、私は学校で、六年生として昼休みに下学年と一緒に遊ぶ活動をしてきました。お昼の放送で呼びかけると、たくさんの人が集まってくれて、一緒に楽しくおにごっこやケイドロをして楽しみました。

「またやりたい！楽しかったよ！ありがとう。」と言ってくれた一年生は、とても嬉しそうでした。こうした自分の活動によって、「学校に来てよかった。」という誰かの喜びをつくることができたことは、とても意味のあることだと思ったので、これからも続けていきたいと思います。

他にも、私はクラブ活動や委員会活動でリーダーをしています。このように、わたしは学校の中に自分の役割があり、学校の役に立っているという実感をもっています。人の役に立つということは、私の大きな喜びとなっています。

「死にたいなら人を巻き込まずに自分だけ死ぬべき。」「死ぬのなら人に迷わくをかけずに死ねばいい。」といった意見は、被害者のことを考えると、気持ちはすごく分かるし、そのような気持ちになるのは当たり前のような気がします。しかし、本当の意味で社会全体から犯罪を減らしていくために、「この社会の中で必要とされていない人なんて誰もいない。」とい

うことをみんなで考えていくことが大切だと思います。この言葉を胸に、私はこれからも自分から人を大切にできる人間として生きていきたいです。